

たいからで御座る」

袈裟はそれを聞いて、ぶる／＼と震へ出した。何にか怖しいことが起つて来るやうに思はれた。

「わたしへのお話、でも夜分では人目がうるさうござります」

「何に、暇はとらせぬ。御免」と盛遠は門の中に入った。

袈裟はもうどうする事も出来なかつた。

「それでは此方へお出で下されませ」

飛石をつたうて奥庭に出て、自分の居間に案内をした。部屋には、仄んのりと行燈の灯かともつて居た。

袈裟が差出したお茶をぐつと呑んで、じつとその顔を盛遠は見つめた。

晝間見た時よりもその顔は美しいと思はれた。夕化粧したその顔が、闇を流れる行燈の灯をうけて、現し花が匂うて居るかのやうに思はれた。盛遠の煩惱の心はま

たも狂ひをめて来た。

「男の口から、このやうなことを申出すのは心苦しいが、打ち明けずに居られないわしの胸の思、今日、はからずも見ためたそなたの姿はわしの胸底にしつくりと刻みつけられた。話によればそなたはもう人妻ださうだが、どとしてわしにあきらめることが出来よう。わしの心の胸は狂うた。わしの胸は、いまにも破れさうぢや、苦しい胸の思ひを語つて、そなたの哀れみに浴したいのが本望でござる」

袈裟は盛遠の口から熱のやうにほとばり出る聲を聞いて居た。何だか怖しい影が自分の傍に近づいて来てゐるを知つた。

「有難い思召し、かたじけなう御座りまするが、わたしにはもう夫のある身、御氣に召すやうなお返事が出来ないのが悲しうございます」と頼いた。

「人妻ぢやといふことは承知の上で、かうして恥も忘れてやつて来たのでござる。わしのために、いろよい返事をして下さるなら、わしはどのやうなことをも厭ひ申

さぬ、のう、男の口から申し出たこと、何とか思案して下され」と言ふ聲は嚴かであつた。

盛遠はまた諄々として言葉をつづけた。

今日、渡邊橋でそなたの秋波に浴したわしは、もう心も魂も奪はれてしまつただが、そなたが、わしの要求を容れて呉れぬとあれば、わしにも考がある。そなたの母の衣川も殺してしまはふ、渡もこの刃の露にかけてしまふ、それでもそなたは色よい返事をして呉れぬか……わしの要求を容れて呉れるなら、どのやうな方法もある。そなたに夫があつて容れられぬなら、そなたを自由の身とするために、渡を殺してしまふではござらぬか？ 渡さへ殺してしまへば、誰も何とも言ふまい。そなたも盛遠の妻となることが出来る。それでも嫌と仰言るか？

盛遠が血相をかへて、にじり寄るので、袈裟も後すだりをするのであつた。

「煩惱の犬追へども去らず。さぞかし、むごい男と思ふだらうが、盛遠の一生の願

ぢや、頼む。明日は渡も歸つて来よう。夜更になつてわしが此處に忍んで来る。そなたはわしを渡の部屋に案内さへすれば、渡の命はもう無いもの、うむ、この部屋の次の間が、渡の寢室か、それでは明晩、忍んで来る、よいか？

袈裟はたゞうつ伏して泣いて居た。現在自分の夫をどうして殺されよう。何といふ無理無體な男であらう。そんな不貞なことが、この袈裟にどうして出来ようか。相手は血氣にはやる遠藤盛遠、このまゝ顧みなかつたら、どのやうなことが起らうとも知れぬ。母者人を手にかけては、子としてのこの身が何と申譯が立たう。あゝ、困つたことになつた」と袈裟はたゞ涙にくるばかりであつた。

「明晩来る。その時にわしの言ふとほりにしなかつたら最後の手段をとらう」

「はい、畏まりました」

もうすでに心をきめた袈裟は、この場は、恚う返事して、盛遠の傍から離れたかつたので、心にもないことを言つた。

「その約束を忘れぬやうに」

盛遠は喜んで歸つたあとで、袈裟は疊にうつ伏したまゝ泣いて居た。どうしても泣かずには居れなかつた。

「あゝ、さうだ。やはりわたしは覺悟をきめよう。わたしは後の世まで、不貞な女とのそしりを受けたうない、あの無理なことを、聞き入れる事が出来よう。わたしは夫の身がはりになつて、死んでしまつた方が、後日になつて、心の苦しみを受けることもなく、煩えることもなく、この上、罪を累ねることもあるまい」

恚う決心した袈裟は、母のために、夫のために犠牲となることにした。

その翌日の夜は來た。夫は折もよく、また他出して、その夜は歸らないことになつて居た。

夜は静かに更けて行つた。袈裟はこの世の名残りに、香を焚きしめて、行燈の灯影も、うす暗くして置いた。

夫の布圍を敷いて、枕もとには烏帽子を置いて、たゞ死の來るのを待つて居た。涙はとめどなくこぼれて來て枕を濡した、歎歎の聲をしのんで、口の中で、南無阿彌陀佛を唱へて居た。

そつと盛遠は忍び寄つて來た、顔を黒頭布でくるんで、手にぬき放した氷のやうな刃が袈裟の腫に映した。

「寝て居るな。今にも俺から殺されるのも知らないで寝て居るな。自分の妻と横取りされることも知らないで寝てゐるな。このまゝ往生した方が苦しみが無くて好いだらう」と罵笑した盛遠の手にした刃が、暗にきらつと光ると見ると、袈裟の首はもう胴體を離れて居た。

盛遠はほつと安心して、枕のもとに轉がつた首をとりあげて、行燈の光にそつと覗いて見ると、思ひかけない袈裟の首であつたので愕いて尻もちついた。

「やあ、これは袈裟の首ぢや、俺は人違ひをした」

慙ん叫んだ盛遠は、その首をじつと見つめて居た。そして、しばらくすると、雨のやうな涙がほろ／＼とこぼれて来た。

「犠牲となるつもりでの覺悟ぢやつたか、可愛さうに、さぞ無理を言ふ男だと、袈裟は恨んで死んだであらう、こんな貞淑な女とは思はなかつた。あゝ、俺が犯した罪が、あまりに大きいのに俺は怖しくなつて来た」

盛遠は首の前に手をついて、何時までも顔をあげ得なかつた。

「俺は非道な行ひをした。俺が犯したこの罪業は何時まで消えることが無い。俺が死んだら、無限地獄に落ちて、責苦に逢はなければならなくなるであらう。俺はそれが怖しくなつて来た。せめて、その罪業からなくなるやうに功德を積まなければならぬ。あゝ、さうぢや」

盛遠は小刀を抜いて、房々とした自分の黒髪を根もとから切り落してしまつて。彼は佛者となつて、自分の罪惡を懺悔して、袈裟の冥福を祈らなければならぬと

心を堅めて、源渡に懺悔して、昨日までの荒武者、遠藤盛遠は、今日は僧侶となつたのである。

文覺上人として源氏の衰微したのを嘆いて、何處からともなく拾つて来た鬘髻を伊豆の頼朝の前にさへげて

「これは左馬頭義朝殿の鬘髻でござる。このやうに姿になられたも、もとを正せば平家のなす業、それを口惜しいとは思し召し給はぬか、残念だとは思召さぬか？ お父君の仇を報ゆるのは、あなた様の仕事でござる。早う兵を擧げて、平家を滅して、再び源氏の天下となされるなら、お父君もさぞかし、地下でお喜びなされるでござらう。何にも心配することはござらぬ。某が京に參つて、平氏追討の院宣をもらつて參じよう、それを機會として旗上をなされるなら、關東八州の者は、皆、源氏の恩恵に浴するもの、さつと、お身方を集るでござりませう」

恚う搔き口説いた荒法師、文覺上人は、その昔、青春の血がみなぎる時に、恚う

した哀しいロマンスに泣いた男であつた。

文覺上人は事蹟は誰も知つて居よう。源氏が再興した動機も、熱い血しほ満ちた文覺上人の賜であつた。

痛快な青年時代の氣概は、何時までも彼の心を離れなかつた。星月夜、鎌倉三代の榮華も儚なく消えはしたけれど、源氏に、ある一時でも再興したのは文覺上人の功績に依ることが多かつた。

源氏の再興を見た彼は、どんなにか喜んだであらう。袈裟を殺して發心した彼の心理を洞察したならば、哀愁の涙を誘ふことを禁じ得ない。

袈裟はその名にふさはしい薄命の女であつた。その短かい生涯には涙ぐますには居れないほどいたはしく思はせるのである。

安珍と美女清姫

南の國は五月に入ると、もう夏らしい暑が訪れる。櫻の花がやつと散る頃に、もう、夏らしい陽が赫々と輝いて、油汗をしぼりとするやうで、たゞ、夢のやうな氣分漂うて居る。さうした周圍に感化せられて、南國は生れる男も女も、戀にかけては熱狂的である。

毎年の夏になると、奥州から一人の僧が、熊野詣をする、まだ若かいのに、毎年かゝさず、遙々と、その信心のほどが奥床しいばかりでなく、頭を青く剃つて、くると涼しい瞳は女にほしいほどで清姫には、妙にその僧侶のことが忘れなかつた。浴衣を身につける頃になると、もう、奥州から、その僧侶が熊野詣りに來はしま

かとそれが待遠うてならなかつた。

その僧侶の名は安珍と言つたが、熊野詣は七月の中旬に、奥州白川在の自分の寺を出て道々を托鉢して来る、熊野詣はもとより、贅澤な真似をするでなく、たゞ、氣がるに、悠つくりと出かけるのであるから、別に急ぐ旅でもないので、紀州路に這入るのは、八月の中旬であつた。

「もう、安珍さまが見える頃ぢや、昨日かと思つてゐたら影も見えず、今日かと思つて暮したが姿と見えぬ。きつと明日になつたらお出なさるに違ひない。安珍さまが見えだなら、今度はもう、昨年きのねんのまゝは逃げやうとしたとて逃がしはせぬ、女の身として恥かしい事を口にして、何んで、このまゝ捨て置かれよう」

初戀を知りそめた娘の戀、たゞ美しい氣高い僧侶姿に戀をして、清姫はもう心の駒も狂ひ行きさうであつた。

「もう、今日も待ぼうけ、夕顔の花も白う闇に浮んで居る、星が閃めき出した。今

宵はまた苦しい一夜を明かさねばならないか」

清姫はほつと苦しい息をして、立上らうとすると、離越しに、夕暮の道を急ぐ、旅僧の姿、その姿をどうして忘れよう

「安珍さまぢや」

恁う叫ぶかと思つと、裸足のまゝ、庭に飛び下りて、木戸口をぬけて往還に出る。

「もうし、安珍さま」と聲をかけた。

旅僧は清姫が見たやうに安珍であつた。呼びかけられて、安珍は立ち止り

「これは清姫さまか、漸く、今、此處まで参りました。今年ことしは悠つくり出来ぬ旅ぢやで、夕暮時を急いで、熊野詣を済まして後、お立寄しようと思つて居ました」

「言葉もかけずに通り過ぎなされるので、妾は氣が氣であります。それにしても、もう夕暮れ時に、熊野詣は明朝早うにして、今宵は悠つくりなされませ」

「有難う御座ります、なれども、信心の道はおろそかにしてはなりません。もうす

ぐ一足参詣して参りませう。参詣の行く道、道草喰つては、せつかくの信心も心もとない、すぐに歸つて参りませう。そして今宵は悠つくりと、面白いお話でも聞かせて下されませ』

まだ男を知らぬ娘の熱烈な戀、それは、女を知らぬ道心堅固の安珍にとつては、怖しく思はれてならなかつた。

『でも、もう夜のこと、熊野までは一里もあれば、今夜は、毎年のやうに家に泊つて、明朝早う、熊野詣をなされませ、詣が済んだら昨年の約束のよう、今年も悠つくり遊んでお出なされませ』

清姫は袖を捉へて放さなかつた。安珍も長い旅にいくらか疲勞を覺へて居たが、毎年の熊野詣、昨年から知りそめた清姫があまりに強い戀の執着、それがただく怖しい、どのやうな怖しい破滅が自分の前に近かついて來て居るかも知れぬやうに思はれた。

清姫の家に泊つて、もてなしを得けるよりも、道傍の堂宇の椽にでも、ころりと轉かつて華婿の園に遊ぶのが頂上のやとに思はれるのであつた。けれども、執着く引きとめる清姫の心を無にするもいぢらしく思はれたのでしかたなく泊ることにした。

この美しい女から戀せられて居る自分はほんとうに幸福な男に違ひないが、佛に仕へる身としては、そんな破戒を犯すことが怖しかつた。

『私が佛者でなかつたなら、このやうな美しい女の二年越しの戀、それをつれなう捨てやうか、奥州白川在から紀州の熊野まで二百里に近かい旅路もいとはず、熊野詣をするのも信心のため、その信心も、清姫と一夜の情を汲んだなら、何にもならぬこと、やはり、私は道心堅固で、道を修めなければならぬ。五欲の樂しは空ちやと、世尊は仰言られた。あゝ、私は誘惑と戦はなければならぬのだ』

奥の部屋に招せられた安珍は、柔かな絹布の布團、緋の枕に靜かに寝て、悠う考

へ込んで居た。

行燈の灯は淡く、安珍の顔を照してゐた。すうつと襖を開く音がした、安珍はそれとさつとつて眼をつぶつて寝込んだ真似をした。

戀に熱して居る清姫が、燃ゆるやうな下着に細い帯をくるりと捲いて、雪のやうに白い脛もあらはに、足音を忍ばせて、安珍の枕もとに座つた。安珍は美しい清姫の姿を見るまいと眼を閉ぢて居た。

「安珍さま〜」

清姫の聲は震へて居た。それでも、安珍は寝入つた風をしてゐた。

「もうし、安珍さま〜」

清姫はいら〜として、その肩のあたりに手をやつて、揺り起した。安珍は狸寝入りをして居た。

「永い旅の疲れて寝入つてお出ぢや、さぞお草臥れではあらうけれど、妾の心はよ

く御存知のはづ、昨年、妾の戀を打ち明けたとき、誓願の事があつて、もう一年待つて呉れと仰言つたに、この一年は妾にとつては、どのやうに待遠しかつたらう。

妾は北の空を仰いで何時も安珍さまのことを思つて泣いてゐた。ほんとうにたち割つて見せたいのは妾の胸、今度は、どうしても、思をとげずには居られない。命にかけての妾の戀、欺まされるやうなことは決してするまい。今宵は憊うまで草臥れて、お出では寝物語も出来まいに、明日も無理に引きとめて、あゝさうぢや〜」

清姫はひとりでよるこんで、何かの成算でもあるやうに、今宵の不首尾を悲しみもせずまた静かに歸つて行つた。

その足音が聞えずなつた時に、安珍はそと眼を開いて、ほつと息をした。

「あの女は戀に狂うてゐる、わたしは、あの女がもう怖しうなつた。わたしは、じつとしては居れない、明日は人知れずこの家を立つて、急いで國許に歸るとしよう、もう來年から、熊野詣もこり〜ぢや」

安珍は夜も明けぬうちに、床をぬけ出して朝露の深い道を急いで、熊野詣をすま
して歸り道についた。

夜が明けてから、安珍の部屋に行つた清姫は、安珍の姿が見えないので、氣も失
ふばかりに愕いた。清姫はそつと、布團の中に手をやつたが、もう床は冷くなつて
ゐた。

「あの人は、妾をだまして、今朝早く、この家を立つたに違ひない。一年待てとい
つたのも、妾を欺したのだ。これほどに美しい女の戀を、すげなくもしり退けやう
とするあの人には、奥州に美しい、妾よりもすつと美しい戀人でもあるに違ひない
それなら、妾もじつとしては居れない、まだそれほどに遠くも行くまい、妾はすぐ
に追かけて、どうしても妾の思をとげなければ、死んでもしにきれぬ。欺されて、
むなしく待つたのが口惜しい欺した男の心が恨めしい。あゝ、妾はもうちつとして
は居れない」

狂氣のやうになつた清姫は、もすそをからげて、裸足のまゝ、庭に飛び降りると、
すぐに木戸口から安珍の跡を追つた。

清姫の心はもう狂うて居た。彼女は一生懸命に走つた。こんなに早く走つても息
つかれもしないのが不思議なほどであつた、早く走る／＼けれども心はまだ早く急
いでゐた。足よりも顔が早く安珍の姿に近づかう／＼として居た。首がいよ／＼長
くなつたかのやうに思はれた。

「もうし、旅の人、此處を一人の若い僧さんが通りはしませんでしたか」
清姫は通りすがりの旅人に聞いた。

「若い僧さん、それなら、さつき、日高川べりに立つて居ました」と答へた。

「もう、日高川まで、それにしても、大した道のりではない。急いで行けば僅かの
時間で行けるであらう」

日高川まで餘程の道のりがあるのに、何時のまにか、河原まで來た。河原には、

一人の老寄りの船頭が、衰をふかして、涼しい木蔭に長くなつて居た。

「もうし、船頭さん、今しがた、この渡しを若い旅の僧さんが通りはしませんでし
たか」

「その僧さんなら、前の船で渡らしやつた、何物かにでも追はれたものゝやうに、
行先を急いで居られたようぢや」

それを聞くと、清姫はまたむか／＼として来た。これほどに美しいと自信をもつ
てゐる自分を毛蟲のやうに嫌つて居る安珍が、もう憎らしくなつて来た。

「船頭さん、お願いでござります。わたくしを向うの岸まで渡して下されませ」

「向う河岸までかなりの河幅、渡船一艘に客一人とは勿體ない、もう四五人の伴れ
がなければこの渡しはわたれませぬ」

もう四五人の道づれが無くては、この川を渡れないとなると、その無駄な時間の
ために安珍は、どこまで遠く逃げるかも知れない。

「そんな悠長なことは出来ない。あゝ、何とかして、この河を渡りたいものぢや」

清姫は河岸に立つて、恨めしさうに、水を見つめて居た。清姫は水に寫つた自分
の顔を見た。執着の相が現はれて、蛇のやうに自分の顔が見えた。

清姫はそれを見て、ぞつと震ひするかと思ふと、黒と紫との物凄いい煙がむら
／＼と立のぼつて、何時の間にか自分の身體は、蛇體になつてゐた。そして、ざん
ぶと、川水の中に飛び込むと、蛇體となつて清姫は、嵩む水を物ともせず、何の苦
もなく河を泳ぎ渡つてしまつた。

清姫はまたも跡を追うた。安珍は何だか、うしろから自分を追ひかける氣配がし
た、彼は、何だか息苦しくなつて来た。と、何時のまにか、道成寺の前まで来てゐ
た。

「さうだ。この寺にかくまつて貰はう」と、庭を帯いて居た老僧に、かくと頼むと
「それは定めし御難儀ぢやらう」と、老僧は安珍に同情してかくれ家を探したが

「あゝ、あそこがよい。釣鐘を下して、その中にかくれて居れば氣がつくまい」と言つて安珍を、その鐘の中にかくした。

蛇體になつた清姫は、道成寺の門の中に躍り込んで本堂を三廻りして探したが、やがて鐘樓の下まで來た。

彼は何にと悟つたか、下された釣鐘をぐるりと取り捲いた。執念がむらくとして鐘が蛇の眞赤な舌の焰に焼けて赤くなつて來た。

鐘の中に端座した安珍は、もう見出されてはこれまでと思つて、經文を唱へて居た。その聲はかすかに外氣を揺はして居た。

蛇となつた清姫はしばらくして、もう何にか首肯して何處ともなく姿を消した。その跡で道成寺の僧どもが、鐘を上げて見ると、安珍僧の姿は見えず、たゞ灰の

かたまりとなつて居た。

安珍の女難、彼に女犯の罪がなかつただけ哀れ深く思はれる。南國の女の戀は熱

狂的であつた。

附録佛者のロマンス 畢

大正十年三月廿二日印刷
大正十年三月廿五日發行

釋迦及佛徒の女難

正價金壹圓貳拾錢



著者

芳川 尠

發行者

池田憲之助
東京市神田區須田町二十四番地

印刷者

太刀川辰藏
東京市神田區四小川町一丁目九番地

印刷所

東華堂
東京市神田區四小川町一丁目九番地

東京市神田區須田町二十四番地

發兌元

學

藝

書

院

電話神田一〇七一番
振替東京四六九七九番

性慾學叢書第一編

醫學博士 羽太銳治先生著

● 四六版總クローヌ
● 金模様入り頗美本

妊娠及避妊の研究

正價金壹圓貳拾錢
送料 金八錢

大好評忽十版

● 何うすれば妊娠するか？ ● 何故妊娠せぬのか
性慾學大家として學界並ぶ者なき羽太博士が多年研究の結果を公表せるもの本書なり、妊娠、不妊、避妊の各章に別ちて説明細密を極め文章平易懇切、且總ふりがな附なれば男女誰でも一讀明瞭に妊娠避妊の眞理を了解し得べし！
▲附録「新マルサス主義批判」
目下歐米の大問題にして且つ今や日本の大問題たらんとする避妊主義の如何なるものなるかを説明し最も嚴正なる批判を下せし雄篇！

東京市神田區 須田町四番 醫學書院 電話 〇一七〇一
東京市神田區 須田町四番 醫學書院 電話 〇一七〇一

性慾學叢書第二編

醫學博士 羽太銳治先生著

● 四六版總クローヌ
● 金模様入り頗美本

性慾に對する婦人煩悶の解決

正價 金壹圓五拾錢
送料 金八錢

現代の婦人が有する幾多の煩悶中、性慾上の煩悶ほど最も甚だしく其心身を苦むるものはあらざる可し。否婦人の煩悶は殆ど悉く性慾上の煩悶なりと稱するも過言にあらず、然らば則ち世の婦人にして性慾に對する自覺あるを得ば、其煩悶は自ら解決せらるゝを得ん、本邦に於る性慾學の泰斗たる著者茲に觀る處あり、性慾に對する婦人の自覺を促して其の煩悶を解決せしめんとし、多大の蘊蓄を傾注して本書を著す、此著者にして此著あり、本書を得たる現代婦人の喜び、夫れ幾干ぞや！

● 現代婦人必讀の名著！！

東京市神田區 須田町四番 醫學書院 電話 〇一七〇一
東京市神田區 須田町四番 醫學書院 電話 〇一七〇一

性慾學叢書第參編

醫學博士 羽太銳治先生著 ●四六版總クローヌ
●金模樣入り頗美本

女と其性的現象

正金壹圓貳拾錢
送料金八錢

▲婦人の性的特徴を説明すること細密を極めて其特
質を一讀明瞭ならしめ
▲婦人の性慾生活に移りて發情期より貞操に至る數
項に分ちて詳説し
▲文化史的婦人觀は此種の著書に見る能はざる著者
獨特の見地に立ちて立論卓拔
▲婦人の職業と犯罪に關しては一層婦人の特質を
赤裸々に露出せしめ
更に結論に至りて婦人の社會的待遇を説き婦人の運動及教育と職業を
説明し今日の社會的變化と婦人との付て所説明快、且つ文章平易にし
て全篇總振かな付きの名著なり。

●婦人とは？此問に答ふる本書のみ！

東京市神田區 須田町四番 醫學藝書院 電話東京 一七〇一 番九七九六

性慾學叢書第肆編

醫學博士 羽太銳治先生著 ●四六版總クローヌ
●金模樣入り頗美本

性慾に對する 男子煩悶の解決

正金壹圓五拾錢
送料金八錢

幸福なる生活を望まば先づ性の悩みより脱せよ
煩悶解決の鑰茲にあり

要 大 次 目

■性の備みと近代思潮 性慾は穢れたるものにあらず 國戀愛は宗教なり 國戀愛耽溺と酒精耽溺 國戀愛の魔力に魅せられ 性慾濫費の害と救済法 國性眼醒めたる者の悲劇 國性慾に依つて自己を毀損する徑路 國恐怖すべき性慾の濫費 國過房と自瀆の害 國性慾は如何にして抑制すべきか 國若返り法 國性の衛生 國生殖器機能障害とは何ぞ 國青年を災する神經衰弱 國生殖器不能の三疾患 國淋菌に關する說明 國梅毒の歴史 國梅毒のあり 國陰莖の疾患に如斯ものあり 國尿道の疾患に如斯ものあり 國外數十項目

●靈藥もより靈術もより本書の一讀最も有効！

東京市神田區 須田町四番 醫學藝書院 電話東京 一七〇一 番九七九六

衛生學大家 澤田順次郎先生著

三六版ポイント活字印刷
二百八十二頁箱入類本
重價金一圓郵送料金八錢

最新
研究

誰にも出来る健康長壽法

最新刊

人生の快樂と幸福とは健康と長壽とにあり、健康にして長壽なるにあらずば、志望の貫徹も事業の成功も得て期すべからず、成功を望み、快樂を欲し、幸福を求むる者は須く本書によりて健康長壽の最新秘法を知れ、本書は衛生學の大家として名聲隆き澤田先生が、最近研究の結果を公開せるものにして、何人にも直に實行し得らるゝ最も確實にして最も簡單なる健康長壽法を詳説せるもの。世の健康者と病者とを問はず、一日速に本書を繙かば、蓋し一日の壽を長うするを得べし、乞ふ直に一本を座右に備へよ。

發
兌

東京市神田區須田町廿四番
振替口座東京四六九七九番

學
藝
書
院

1871

終